

総合周産期母子医療センター（小児科部門）

< 新生児集中治療部 >

1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

部長（准教授）	河野 由美
病棟医長（講師）	矢田ゆかり
医員（助教）	小池 泰敬
	西村 仁
（病院助教）	俣野 美雪
	鈴木 由芽
（レジデント）	下澤 弘憲
	谷口 周平

他、小児科と兼務

2. 総合周産期母子医療センター（小児科部門）の特徴

栃木県の総合周産期センター二施設のひとつとして、栃木県で出生するハイリスク新生児のほとんどを二分する形で診療している。地方の中核病院であり、入院するハイリスク新生児の疾患は、超低出生体重児から先天異常、外科疾患など多岐にわたる。勤務するスタッフは全員、診療科としては小児科に属しており、兼務である。

認定施設

日本周産期・新生児医学会認定研修施設

認定医

日本周産期・新生児医学会（新生児）専門医
矢田ゆかり、小池 泰敬

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 入院患者数

411名

院内出生373名（母体外来観察例79名、母体搬送47名、母体外来紹介247名）、院外出生38名（病院等からの搬送34名、自宅出生等4名）

2) 人工呼吸器管理数・率

150/411例、36.4%

3) 生存率・死亡数等

GA (W)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
22	1	0	1	0.0
23	2	2	0	100.0
24	3	1	2	33.3
25	5	5	0	100.0
26	5	4	1	80.0
27	10	10	0	100.0

28	11	11	0	100.0
29	8	7	1	87.5
30	10	10	0	100.0
31	10	10	0	100.0
32	9	9	0	100.0
33	22	22	0	100.0
34	31	31	0	100.0
35	35	35	0	100.0
36	31	31	0	100.0
37以上	218	216	2	99.1
計	411	404	7	98.3

BW (g)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
< 500	3	2	1	66.7
< 750	14	11	3	78.6
< 1,000	11	11	0	100.0
< 1,250	18	18	0	100.0
< 1,500	21	20	1	95.2
< 1,750	28	27	1	96.4
< 2,000	57	57	0	100.0
< 2,500	97	96	1	99.0
> 2,500	162	162	0	100.0
計	411	404	7	98.3

年間死亡症例 7例

4) 死亡症例内訳

在胎22週、仮死、RDS、くも膜下出血

在胎24週、肺低形成、緊張性気胸

在胎24週、419g、敗血症（CNS）

在胎26週、MD双胎、NEC

在胎29週、左心低形成症候群

在胎37週、DD双胎、鰓弓症候群

在胎40週、18trisomy, CHD

5) 先天性心疾患入院例

有意な血行動態異常を呈する中等症・重症例30例。

その内、胎児診断14例、PICU転科・手術22例、NICU内死亡2例。

6) 多胎入院数

多胎83例

7) 外科症例（手術例のみ）

15例、光凝固術8例

8) 逆搬送

40例。うち、状態安定後、搬送元の病院等に転院したもの39例。1例は脳低温療法目的に獨協医大に転院。

4. 事業計画・来年の目標

周産期医療をめぐる状況は毎年、目まぐるしく変わっている。栃木県出生の新生児の他県への搬送は非常に少ないと考えられてきたが、県内の産科施設の状況も不安定であり、このまま、県内出生全例の県内収容が継続できるか不透明である。今後も、県内総合周産期センターである獨協医大、地域周産期センターと協力し、連携を図って、困難な状況を乗り越えていきたい。自治医大NICU内には、周産期連携センターとしての役割もあり、来年もこれらの責任を果たしていきたい。

去年は、再入院例14例を入れると、センター開設後、過去最多の新生児入院数だった。超低出生体重児の出生数も28名と多かった。死亡例は昨年（5名）よりは多かったが、例年よりは少なかった。この傾向を今後も維持していきたい。

医療面での新たな取り組みとしては、昨年導入した機器を用いた低体温療法を開始する予定である。

09年度に自治医大周産期センターは周産期医療に携わる人材育成および地域の周産期医療レベルの向上のために、文科省から補助金を受け、「周産期医療教育・支援部（JPEC）」創設による種々の事業を開始した。12年度も、このJPECと共同して、新たな周産期医療の人材養成を行い、同時に栃木県の周産期教育も幅広く行っていきたい。具体的には、新生児蘇生法講習会Aコースの開催を計画している。

また、県から栃木県周産期医療研修会のための補助金を受けており、これにより、新生児蘇生法講習会Bコースを3回行うことも計画している。

日本周産期・新生児医学会の新生児専門医2名だが、現在3名が研修中である。今後も人材養成をはかり、さらに新生児医療を行う医師を増やしていきたい。

また、医学研究の面でも世界に貢献できるように、英語論文報告を継続していきたい。